

――〇一五年は、新国立競技場と杭の施工品質が社会問題となった。また、「就労履歴管理システム（仮称）の構築に向けた官民コンソーシアム」がスタートした年でもあった。長年、技能技術者の就労履歴管理による処遇改善を訴えてきた一員として、この動きが一過性のものでなく、実現に向けて着実に歩みを進めていくことを切に願う。これらの問題・課題は、それぞれ独立の事象のようにみえるが、建設業界のマクロな状況を反映しているように思う。本稿では、そのことを考えてみたい。

かつて、日本の建設会社は、発注者の要求が曖昧であっても、設計図書が不完全であっても、優れた品質性能の建築をつくり上げてきた。不確実性もたらす大きなリスクを引き受けてきたことになるが、そのことには、右肩上がりの時代にはある種の合理性があったことは安藤正雄氏らが指摘している（『建築ものづくり論』有斐閣）。しかし、時代状況は大きく変わり、日本の建設会社はこうしたリスクを背負えなくなつた。となれば、発注者は、本来は自らが背負うべき不確実性もたらすリスクに対処するため、能力・人材を確保しなければならぬ。だが、こうした認識は必ずしも拡がっておらず、多くの発注者は建設会社が何とかしてくれると今なお漠然と期待してしまっている。新国立競技場に関する諸混乱の要因はここにある。

一方、契約範囲を超えた責任を負わなくなつ

各 人 各 説

現場空洞化の危機に対策を

東京大学生産技術研究所 教授

野城智也

Tomonari Yashiro



たとはいえ、日本の建設会社が長年かけて培ってきた品質管理システムが継承されなくなってきたことには危惧を禁じ得ない。生産現場の現状を見るに、契約範囲の責任すら果たせないおそれが高まっているといっても過言ではないように思う。

日本の建築の性能品質は、多くの人々の暗黙知の連鎖で支えられてきた。施工図や作業要領書に明記しなくとも、また、口頭での指示すらしなくとも、以心伝心でやるべきことを果たしてくれる技能技術者が性能品質を支えてきた。それだけに、高齢化による技能技術者の離職と入職者の少なさは、性能品質の確保という観点からみてもゆゆしき事態である。前記の就労履歴管理システムを一日も早く導入し、技能技術者の方々にとってキャリアパスの描ける職場にすることは急務である。

そして何よりも、杭の問題に垣間見える現場の空洞化は放置してならない。例えば、施工図の過度の外注化によって専門工業者に不整合を指摘されても対応出来ないような管理技術者や、型枠や配筋を自らの目で点検しないままにコンクリートを打設しても痛痒を感じない管理技術者が増えているように思えてならない。日建連の会員会社が現場の空洞化の深刻さを認識し、現場の管理技術者の資質向上や技術・ノウハウの継承に包括的な対策を施していくことを切望したい。